

山姥

世阿弥作

前

ワキ 女の従者

ツレ 都の遊女

シテ 山に住む女

後

ワキ 前に同じ

シテ 鬼女

地は 越中

季は 雑

「善き光りぞと影たのむ。く。仏の御寺尋ねん。

「是は都方に住居仕る者にて候。又是に渡り候ふ御事は。百魔山姥とてかくれなき遊女にて御座候。かやうに御名を申すいはれは。山姥の山廻りするといふ事を。曲舞に作つて御謡ひあるにより。京童部の申しならはして候。又此頃は善光寺へ御参りありたき由承り候ふ程に。某御供申し。唯今信濃の国善光寺へと急ぎ候。

「都を出で、さ、波や。志賀の浦船漕がれ行く。末は有乳の山越えて。袖に露散る玉江の橋。かけて末ある越路の旅。思ひやるこそ遥なれ。

「梢波立つ汐越の。く。安宅の松の夕煙。消えぬ憂き身の罪を切る。弥陀の剣の砥並山。雲路うながす三越路の。国の末なる里問へば。いとゞ都は遠ざかる。境川にも着きにけり。く。

「御急ぎ候ふほどに。是は、や越後越中の境川に御

着きにて候。暫く是に御座候ひて。猶々道の様体をも御尋ねあらうずるにて候。

ツレ詞

「げにや常に承る。西方の浄土は十万億土とかや。是は又弥陀来迎の直路なれば。あげろの山とやらんに参り候ふべし。とても修行の旅なれば。乗物をば是にとゞめ置き。徒歩はだしにて参り候ふべし。道しるべして給ひ候へ。

ワキ

「あら不思議や。暮るまじき日にて候ふが俄に暮れ

て候ふよ。さて何と仕り候ふべき。

シテ

「なふく旅人御宿参らせうなふ。是はあげろの山とて人里遠き所なり。日の暮れて候へば。わらはが庵にて一夜を明させ給ひ候へ。

ワキ

「あらうれしや候。俄に日の暮れ前後を忘れて候。やがて参らうずるにて候。

シテ

「今宵の御宿参らす事。とりわき思ふ子細あり。山姥の歌の一節うたひて聞かせ給へ。年月の望な

り鄙の思出と思ふべし。其為めにこそ日を暮らし。
御宿をも参らせて候へ。いかさまにも謡はせ給ひ
候へ。

ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。さて誰と
見申されて。山姥の歌の一節とは御所望候ふぞ。

シテ「いや何をか包み給ふらん。あれにまします御事
は。百魔山姥とてかくれなき遊女にてはましますさ
ずや。まづ此歌の次第とやらんに。よし足引の山

姥が。山めぐりすると作られたり。あら面白や候。

詞「是は曲舞に依りての異名。さて誠の山姥をば。如
何なる物とか知ろしめされて候ふぞ。

ワキ「山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候
へ。

シテ「鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人なりと
も。山に住む女ならば。妾が身の上にてはさぶら
はずや。年頃色には出ださせ給ふ。言の葉草の露

ほども。御心には掛け給はぬ。恨み申しに來りたり。道を極め名を立てゝ。世情万徳の妙花を開く事。此一曲の故ならずや。然らば妾が身をも弔ひ。舞歌音楽の妙音の。声仏事をもなし給はゝ。などか妾も輪廻をのがれ。歸性の善所に至らざらんと。

カル「恨みを夕山の。鳥獸も鳴きそへて。声をあげろの山姥が。靈鬼是まで來りたり。

ツレ「不思議の事を聞く物かな。さては誠の山姥の。是まで來り給へるか。

シテ「我国々の山廻り。今日しもこゝに來る事は。我名の徳を聞かん為なり。謡ひ給ひてさりとては。我妄執を晴らし給へ。

ツレ「此上はとかく辞しなば恐ろしや。もし身の為めやあしかりなんと。はゝかりながら時の調子を。取るや拍子をすゝむれば。

シテ「しばさせ給へとてもさらば。暮るゝを待ちて月の

夜声に。謡ひ給はゞ我も又。誠の姿をあらはすべし。すはやかげろふ夕月の。

歌「さなきだに。暮るゝを急ぐ深山辺の。

地「暮るゝを急ぐ深山辺の。雲に心をかけ添へて。此

山姥が一節を。夜すがら謡ひ給はゞ。其時わが姿をも。あらはし衣の袖つぎて。移舞をまふべしと。いふかと思れば其まゝ。かき消すやうに失せにけ

り。く。(中人)

ツレ「あまりの事のふしぎさに。さらに誠と思ほえぬ。

鬼女が詞を違へじと。

歌「松風ともに吹く笛の。く。声すみわたる谷川

に。手まづさへぎる曲水の。月に声すむ深山かな。く。

後ジテ

「あら物すごの深谷やな。寒林に骨を打つ霊鬼。泣くく前生の業を恨む。深野に花を供ずる天人。

かへすぐも幾生の善をよろこぶ。いや善悪不二。
何をか恨み何をか喜ばんや。万箇目前の境界。懸
河渺々として。巖峨々たり。山又山。いづれの工
か青巖の形を削りなせる。水また水。誰が家にか
碧潭の色を染め出だせる。

ツレ「恐ろしや月も木深き山陰より。其さま化したる顔
ばせは。其山姥にてましますか。

シテ「とてもはや穂に出でそめし言の葉の。気色にも知

ろしめさるべし。我にな恐れ給ひそとよ。

ツレ「此上は恐ろしながらうば玉の。闇まぎれよりあら
はれ出づる。姿詞は人なれども。

シテ「髪にはおどろの雪を戴き。

ツレ「眼の光は星の如し。

シテ「さて面の色は。

ツレ「さにぬりの。

シテ「軒の瓦の鬼の形を。

ツレ「今宵始めて見る事を。」

シテ「何にたとへん。」

ツレ「古への。」

地「鬼一口の雨の夜に。く。雷なりさわぎ恐ろしき。

其夜を思ひ白玉か。何ぞと問ひし人までも。我身
の上に為りぬべき。浮世がたりも恥かしや。く。

シテ詞「春の夜の一時を千金に換へどとは。花に清香月に
陰。是は願ひのたまさかに。行き逢ふ人の一曲の。」

其ほどもあたら夜に。はやく謡ひ給ふべし。

ツレ「げに此上はともかくも。いふに及ばぬ山中に。」

シテ「一声の山鳥羽をたゝく。」

ツレ「鼓は滝波。」

シテ「袖は白妙。」

ツレ「雪をめぐらす木の花の。」

シテ「何はのことか。」

ツレ「法ならぬ。」

地 「よし足引の山姥が。く。山廻りするぞ苦しき。

シテクリ 「夫れ山と謂つば。塵泥より起つて。天雲かゝる千丈の峰。

地 「海は苔の露よりしたゞりて。波濤を畳む万水たり。

シテ 「一洞空しき谷の声。梢に響く山彦の。

地 「無声音を聞きたよりとなり。声にひゞかぬ谷もがなと。望みしもげにかくやらん。

シテ 「ことに我住む山家の景色。山高うして海近く。谷

深うして水遠し。

地 「前には海水瀼々として。月真如の光りをかゝげ。

後には嶺松巍々として。風常樂の夢を破る。

シテ 「刑鞭蒲朽ちて蛩むなしく去る。

地 「諫鼓苔深うして。鳥驚かずともいひつべし。

クセ 「遠近の。たづきも知らぬ山中に。おぼつかなくも呼子鳥の。声すぎき折々に。伐木丁々として。山さらに幽なり。法性峰そびえては。上求菩提をあ

らはし。無明谷深きよそほひは。下化衆生を表して。金輪際に及べり。そもく山姥は。生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便りにて。至らぬ山の奥もなし。

シテ「然れば人間にあらずとて。

地「隔つる雲の身をかへ。仮に自性を變化して。一念化生の鬼女となつて。目前に来れども。邪正一如と見る時は。色即是空其まゝに。仏法あれば世法

あり。煩惱あれば菩提あり。仏あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあり。柳は緑花は紅の色々。さて人間に遊ぶ事。ある時は山賤の。樵路に通ふ花の陰。やすむ重荷に肩を貸し。月もろともに山を出で。里まで送るをりもあり。又ある時は織姫の。五百機立つる窓に入つて。枝の鶯糸くり。紡績の宿に身を置き。人を助くるわざをのみ。賤の目に見えぬ。鬼とや人のいふらん。

シテ「世を空蟬の唐衣。

地「払はぬ袖に置く霜は。夜寒の月に埋もれ。打ちす
さぶ人の絶間にも。千声万声の。砧に声のしでう
つは。たゞ山姥がわざなれや。都に帰りて。世語
にせさせ給へと。思ふは猶も妄執か。唯うち捨て
よ何事も。よし足引の山姥が。山廻りするぞ苦し
き。

シテ「あしびきの。

地「山めぐり。

シテ「一樹の陰一河の流れ。皆これ他生の縁ぞかし。ま
してや我名を夕月の。浮世をめぐる一節も。狂言
綺語の道すぐに。讃仏乗の因ぞかし。あら御名残
惜しや。いとま申して帰る山の。

地「春は梢に咲くかと待ちし。

シテ「花を尋ねて山めぐり。

地「秋はさやけき影を尋ねて。

シテ「月見る方にと山めぐり。

地「冬はさえ行く時雨の雲の。

シテ「雪をさそひて山めぐり。

地「めぐりくゝて。輪廻を離れぬ妄執の雲の。塵つも
つて山姥となれる。鬼女が有様みるやくゝと。峰
にかけり谷に響きて。今までこゝにあるよと見え
しが。山また山に山めぐりして。行方も知らずな
りにけり。